osaka city university news

市大広報

特集：文学研究科の「21世紀COEプログラム」

―世界に拠点を展開!―

2003年8月　第51号

文学研究科の「21世紀COEプログラム」世界に拠点を展開！

文学研究科
栄原　永遠男

COE採択される！

「21世紀COEプログラム」とは、平成十三年六月に文部科学省が打ち出した「トップ30」構想を継承するもので、COEとは、センター・オブ・エクセレンス（卓越した拠点）の略称です。大学等に世界最高水準の研究教育拠点を育てるため、すべての学問を一〇分野にわけ、各分野二〇件程度の研究計画を採択し、予算の重点配分を行う制度です。

文学研究科では、これに採択されることがきわめて重要であると考え、ぜひとも申請することとしました。しかし、どの分野に手を挙げるのか、どのような構想を軸とするか、文学研究科の多様な専攻のうち、どの専攻を中心とし、どのようなメンバーで申請するか、どのように若手研究者の教育プログラムを用意するのか、どのような予算案とするか、その他さまざまな点を検討する必要があり、くり返しくり返し議論しつづけました。

その結果、「都市文化創造のための人文科学的研究」（拠点リーダー、阪口弘之前文学研究科長）というプログラム名称を掲げ、十八名の事業推進担当者を中心として、「人文科学」分野に応募することとなりました。歴史学を中心とする人文科学の立場にたち、都市を文化の視点から学問的に捉えることを特色とする構想にまとめて、文部科学省に申請をしました。

文学研究科の申請は、幸いにも「人文科学」分野二〇件の一つとして採択されました。この分野では、公立大学からは唯一の採択でした。

文学研究科は、このCOEプログラムによる研究を、大阪市立大学が展開している新たな研究体制の一つである「重点研究」として位置づけられるべきものと考えています。COEによって基礎的研究を充実し、その成果を、都市大阪に、そして世界の都市に有効に還元していきたいと思います。

都市文化研究センターを設置する

(1) 都市文化研究センター

COEとは、世界的な研究教育拠点を形成することをめざすものですから、文学研究科では、平成十四年一〇月の教授会で「都市文化研究センター規程」を制定し、「都市文化研究センター　Urban-Culture Research Center」（以下、本部センターまたはUCRCと略す）を設置して、これを研究教育拠点とすることとしました。センターの設置とこの規程とは、同十一月の部局長会で了承されています。

(2) センター会議・常任委員会

本部センターの概要は、組織図(1)(2)に示したとおりですので、これによって簡単に説明します。まずCOEの拠点リーダー・副リーダーが所長・副所長になっています。このもとに事業推進担当者十八名によるセンター会議が置かれており、この会議ですべての方針が決定されます。また常任委員会は、所長・副所長とCOE事務局員（オブザーバー）によって構成され、センター会議に対して、議案の審議を依頼したり、状況の説明をしたりします。

(3) 所属メンバー

本部センターの所属メンバーは、つぎの三種類からなっています。第一は、事業推進担当者十八名です。第二に、それ以外の文学研究科教員有志（事業推進協力者）、そして第三に、COE研究員と博士研究員です。これらの所属メンバーは、つぎに述べるABC三チームのいずれかに所属して共同研究に携わるとともに、適宜その他各種委員会にも所属して、COE事業の推進に尽力していただいています。また、とりわけCOE研究員を次代を担う若手研究者として育てることに格別の配慮を払っています。

(4) ABCチーム

本部センターには、三つの共同研究チームが置かれています。A「比較都市文化史研究」、B「現代都市文化研究」、C「都市の人間研究」の三つです。この三チームは、各運営委員会での相談にもとづいて共同研究を進めるとともに、各サブセンターにおける共同研究にも深くかかわっています。

(5) サブセンター

杉本キャンパスにある本部センターに対して、その支部にあたるサブセンターを世界各地に設け、各サブセンターごとに現地の大学・研究機関と、都市文化に関する共同研究を

進めるというのが、私たちのCOEの最大の特色です。これまでに、上海市、バンコク市、ジョクジャカルタ市、ロンドン市、ハンブルク市などの世界の諸都市に五カ所のサブセンターを設けています。さらに北京にも開設する予定です。それぞれの共同研究は、各サブセンターごとの運営委員会が、右に述べたABC三チームの運営委員会と密接に連携しつつ、推進しています。

(6)COE研究員・博士研究員

文学研究科のCOEでは、大学院学生や若手研究者の育成を重視しています。このため、COE研究員の制度を発足させました。これは、国内と海外の二つに分かれます。

国内のCOE研究員は、文学研究科内外の博士課程大学院学生や同課程単位取得退学者に対して公募し、研究計画と業績によって採用するものです。彼らは、年間一定額の研究補助金を交付され、ABCいずれかのチームに所属してその共同研究活動に参加し、インターナショナルスクールに参加します。また、希望者の中から選抜して、各サブセンターに数ヶ月間派遣し、そこでの共同研究に加わってもらいます。平成十四年度は二四名、平成十五年度は三〇名を採用しました。この中には、他大学の大学院学生も含まれています。

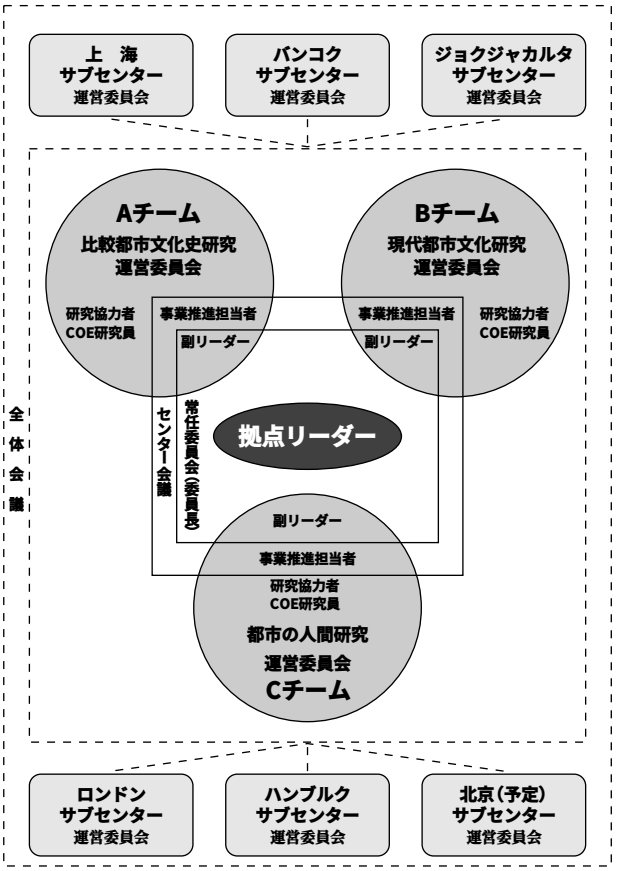
海外のCOE研究員は、各サブセンターごとに共同研究の相手大学に依頼し、推薦されてきたものを相手大学と相談のうえ採用するものです。平成十五年度は六名採用します。国内のCOE研究員として学位を取得したものは、大阪市立大学の博士研究員に採用されることになっています。

(7)インターナショナルスクール

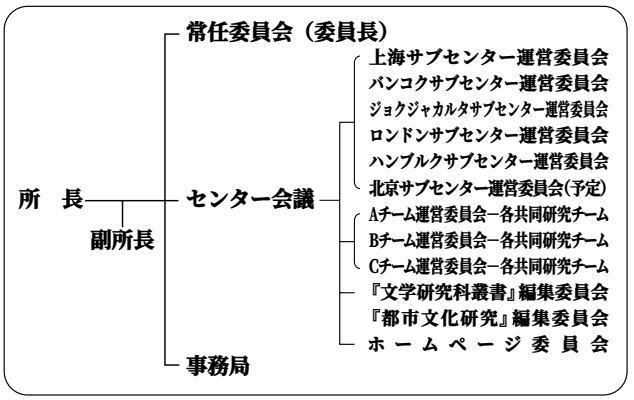
都市文化研究センターに付属する教育組織として、平成十五年度に設置したものです。各サブセンターから招聘するCOE研究員（各大学の博士課程大学院学生や若手研究者）や、日本人のCOE研究員を主たる対象として開かれる授業です。これには、学術交流協定を結んだ大学・研究機関を中心に、世界の優れた研究者を招聘して講義をしてもらうことになっています。これによって、教員レベルだけでなく、COE研究員を中心とする若手の研究者のレベルでも共同研究・学術交流を推進していこうとしています。

(8)各委員会・事務局

本部センターには、上記のABCチーム運営委員会、各サブセンター運営委員会のほか、『文学研究科叢書』編集委員会、『都市文化研究』編集委員会、ホームページ委員会という三つの委員会があり、さらにCOE事務局が置かれています。これらの各委員会や事務局については、項を改めて説明することにしましょう。



都市文化研究センター組織図（1）



都市文化研究センター組織図（2）

サブセンターを設置する

現地の大学との間で締結した学術交流協定にもとづいて、私たちは世界各地の都市に五カ所のサブセンターを設置してきました。各サブセンターの設置状況と、そこで行っている共同研究の活動状況を紹介しましょう。

(1) 上海サブセンター

大阪市と上海市とは姉妹都市・友好都市・ビジネスパートナー都市の関係にあります。文学研究科は、この上海市の伝統ある華東師範大学の人文・法政・教育科学・資源及び環境科学・外国語の五学院と学術交流協定を結びました。

このほど同大学内に、田家炳教育書院という巨大な建物が建設されました。私たちは、この新しい建物の中に、二室からなるサブセンターを設置することができました。センター内には、共同研究の推進に必要なIT・事務機器類、事務用品を備え、機能的な研究環境を整え、本年一月に盛大な開所式を行ないました。これには、大阪市立大学事務局や大阪市上海事務所の協力を得ることができ幸いでした。

開所式とともに、両大学教員による第一回研究会を開催し、今後の共同研究・共同調査について意見交換をいたしました。これらの内容はニューズレター第一号として中国側で刊行されています。また、三月に第二回研究会を開き、共同研究・共同調査について話し合いを進めました。これもニューズレター第二号にまとめられました。

これらとは別に、文学研究科教員が一～三月に滞在し、華東師範大学側との連絡・協議、共同研究の推進にあたってきました。新年度から、上海を主たる対象として、現代都市社会の実態調査を日中共同で実施し、そのデータや研究成果を研究書にまとめて、日本（日本語）と中国（中国語）で出版する、というのが共同研究のあらましです。しかし、残念なことに、三月ごろからSARS問題が深刻化したため、沈静化を待っているという状況です。共同研究が可能となり次第、すぐにでも取り組みを再開する予定です。

(2) バンコクサブセンター

バンコク市と大阪市は、ビジネスパートナー都市提携を結んでいます。市の中心部に広大なキャンパスを有するタイ屈指の名門チュラロンコーン大学芸術学部と学術交流協定を結びました。そして、学芸学部・芸術学部棟の一室に、二月からサブセンターを開設しました。

このサブセンターには、チュラロンコーン大学側との話し合いの結果、事務補助員を現地採用して常駐してもらうことになりました。この事務補助員は、サブセンターの整備、資料収集と整理、サブセンターに出張する文学研究科教員や後述するCOE研究員のサポート、さまざまな連絡業務などにあたってもらっています。すでに文学研究科の教員数名が、当サブセンターに滞在して、整備・管理にあたるとともに共同研究・学術交流に従事しています。また、チュラロンコーン大学の教員を三月に一名招聘し、市大での共同研究に参加してもらいました。秋にももう一名を招聘する予定です。

四月に、両大学共同主催で、サブセンター開設記念シンポジウムを開きました。セレモニーに続いて、文学研究科教員四名、チュラロンコーン大学教員四名が報告を行い、成功裡に終了しました。この内容は、今秋にタイで出版する予定（英文）です。

(3) ジョクジャカルタサブセンター

私たちは、ジョクジャカルタ市にある国立ガジャマダ大学大学院文化科学研究科とインドネシア国立芸術大学という二つの大学と学術交流協定を結び、共同研究・学術交流を進めつつあります。両大学とも、インドネシアの総合大学・芸術大学のトップにランクづけられています。

私たちのゲストハウスは、どちらかの大学の中に置くのではなく、両大学の中間地点にあるゲストハウスの一室にすることとし、本年一月以来長期間にわたって確保しています。

私たちが国立ガジャマダ大学とインドネシア国立芸術大学に提案した共同研究は、両大学の研究者の大きな関心を呼び、芸術学・社会学・歴史学・地理学その他の分野で、都市文化を中心とした共同研究を進めつつあります。本年一月以来、文学研究科の教員やCOE研究員があいついでサブセンターに滞在し、共同研究を進めています。また、今夏以降、両大学から教員と若手研究者を文学研究科に招聘し、共同研究を進める計画です。

さらに、三月には、サブセンター設立記念第一回シンポジウムを、三大学共同主催でガジャマダ大学本部メディアルームで開催しました。開設記念セレモニーに続いて、日本側は文学研究科教員三名と大阪府立大学教員一名（市大非常勤講師、COE共同研究者）の計四名、インドネシア側からは両大学から二名ずつが報告を行いました。多くの参加者があり、盛大に行われましたことは、喜ばしいかぎりです。

シンポジウムの内容は、十分に編集した上で、今秋にインドネシアで刊行する予定（英文）になっています。

(4) ロンドンサブセンター

イギリスの首都ロンドンの伝統あるロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）と、私たち文学研究科は学術交流協定を結びました。これにもとづいて協議を重ねた結果、ロンドン大学構内に設置するのではなく、ロンドン市内の民間不動産を借り上げ、サブセンターとして整備することとなりました。

ただちに文学研究科教員を派遣して、IT機器・事務機器・生活用品等の整備を行い、宿泊施設と研究室からなる快適なサブセンターが誕生しました。このサブセンターには、これまで文学研究科教員やCOE研究員がつぎつぎと滞在しています。また、SOASの教員や若手研究者を、七月から順次文学研究科に招聘し、インターナショナルスクールでの授業、共同研究会での発表、その他を予定しています。

四月には、サブセンター開設記念の国際シンポジウムを開催し、文学研究科二名、ロンドン大学二名、大英博物館一名、立命館大学一名の計六名が研究発表を行いました。

ロンドンサブセンターでは、SOASのほか、大英博物館、立命館大学と共同で、日英の博物館での展覧会の開催を目的とする国際共同研究を進めています。大阪市立大学でも、一〇月にワークショップを開催する予定です。これらの内容も順次報告書として公刊します。

(5) ハンブルクサブセンター

大阪市とハンブルク市とは、姉妹都市・友好都市の関係にあります。ハンザ同盟の中核都市であるハンブルク市に所在する伝統あるハンブルク大学と、わが大阪市立大学とは、大学間の学術交流協定を平成四年に結んでいます。

これにもとづいて、サマースクールや長期留学の形で本学の学生がハンブルク大学で学んでおり、ハンブルク大学の学生もつぎつぎと来日しています。サマースクールには、文学研究科の教員がボランティアで付き添い、ドイツでの学生の勉学の世話をしていることも、申し添えておきましょう。また、文学研究科には、ハンブルク大学に派遣された経験のある教員が多く、同時にたくさんの招聘研究者を受け入れています。さらに、文学研究科では、平成十四～十六年度の三年間にわたり、ハンブルク大学と協力して「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」というテーマで、大阪市立大学プロジェクト研究を推進中です。

このように、文学研究科はハンブルク大学とさまざまな結びつきを築いてきましたが、そのドイツ側の受け皿となっていただけたのが、東洋学部アジア・アフリカ研究所の日本学科でした。今回のサブセンター設置にあたっても、学科内の一室の使用を許可していただけるという、格別の配慮を得ることができました。また、同大学のゲストハウスを使用する便宜も得ることが出来ました。

本年六月には、サブセンター開設記念共同研究会をハンブルク大学で開催しました。文学研究科教員三名、ハンブルク大学教員二名がそれぞれの研究成果を報告し、討論を行いました。また、ハンブルク大学日本学科の学生諸君に対する授業を行いました。この共同研究会ならびに授業の内容は、今秋に報告書として刊行する予定です。

今後、COE研究員や文学研究科教員がサブセンターを訪れ、在独日本古典籍その他の共同研究に従事し、研究書の公刊をめざします。これに対して、秋以降、ハンブルク大学から研究者を招聘し、インターナショナルスクールへの参加、シンポジウムでの報告、共同研究の推進を予定しています。

ドイツでは、デュッセルドルフ市にあるドイツ「恵光」日本文化センターとも、文学研究科は学術交流協定を結びました。同センターには、すでに四月に文学研究科教員が招聘を受け、同センター主催の学会に参加しています。九月以降、同センターの研究員を文学研究科に招聘し、インターナショナルスクールに協力してもらうとともに、共同研究を推進する予定になっています。

(6) 北京サブセンター（予定）

私たちは、まず中国社会科学院歴史研究所の研究者と共同研究を行うことからはじめました。三月に同研究所から研究者を招聘し、共同研究会を開催し、今後の共同研究の進め方について相談しました。また、学術交流協定の締結についても具体的に話を進めました。

これにもとづいて、新年度から本格的に共同研究を推進する予定でしたが、SARSの流行により、残念ながらしばらく中断せざるをえない状況です。北京市内にサブセンターを設ける計画も、しばらく停滞しています。沈静化とともに、急速に計画を進め、サブセンターを開設するつもりです。日中共同で都市史・都市文化史に関する論文集（中国文）を刊行する計画が進行中で、論文の執筆・文献目録の作成を進めています。

各種委員会とCOE事務局

本部センターには、先に挙げた組織図(2)のように、いくつかの委員会が置かれています。各サブセンターの運営委員会についてはすでにふれましたので、ここでは、それ以外の委員会の活動について説明することとします。

(1) Aチーム運営委員会

「比較都市文化史研究」は、都市文化の歴史を比較検討し、新たな都市文化を創造するための方向性をさぐることを目的としています。大阪を中心とする日本の諸都市と、アジア・欧米の諸都市とを比較検討し、都市文化の担い手、社会関係、空間構造、都市間ネットワークなどの諸問題に取り組んでいます。各都市の調査のために文学研究科教員を派遣する予定です。

これまでに一〇回の研究会・運営委員会を開き、海外・国内各地の研究者を招いて討論を積み重ね、COE研究員に発表してもらっています。また、大阪関係の古文書の画像による収集、研究文献データベースの作成を進めています。また、北京サブセンターの開設をにらみつつ、中国側との共同研究に取り組んでいます。

(2) Bチーム運営委員会

「現代都市文化研究」では、多文化共生と都市的生活様式をキーワードとして、現代の日常生活世界における人間の文化的営み、現代社会や文化の中での人間生活の具体的な姿を解明することをめざしています。

上海・バンコク・ジョクジャカルタのサブセンターを拠点として、それぞれの関係大学と共同で実態調査や共同研究を実施しています。これまで十二回の研究会・運営委員会を開いて、海外研究者の講演、COE研究員の研究発表や、調査の実施計画、共同研究について検討しています。

(3) Cチーム運営委員会

「都市の人間研究」では、人間の思想・宗教・文学、芸術・芸能などを題材として、過去・現在の都市に生きる人間の営みを研究することを目的としています。大阪をはじめ西欧・アジアの諸都市を対象として、都市開発による生活環境の変化によって生じた新旧の価値観や生活様式の対立・多様化、都市生活と芸術文化との関係、都市住民の精神生活などを、文献・実態調査などにより比較文化史的手法を用いて研究しています。これまで九回の研究会・運営委員会を開き、文学研究科教員やCOE研究員の研究発表やCチームの運営について検討しています。Cチームの活動は、主としてロンドンとハンブルクのサブセンターの活動と深くかかわっています。

(4)『文学研究科叢書』編集委員会

文学研究科の研究成果をつぎつぎと世に問う目的で、『文学研究科叢書』を発足させることとなりました。COEによる国際シンポジウム、国際共同研究の成果を中心に、ABCチームの研究成果、これらの過程で生まれた文学研究科教員個人やグループの研究成果なども、順次刊行していく予定です。

その第一巻として、三月に『アジア都市文化学の可能性』(清文堂、三三六ページ)が刊行されました。また、今年度中に第二巻も刊行される予定です。

なお、サブセンターの項でもふれましたように、各サブセンターごとに研究成果を専門書の形で、外国語あるいは日本語で刊行する計画がいくつも進んでいます。これらも、広義の『文学研究科叢書』の一部を構成するものと言えるでしょう。

(5)『都市文化研究』編集委員会

COEによる研究教育活動の機関誌として、学術雑誌『都市文化研究』を年二冊のペースで刊行していく計画です。ABCチームやサブセンターでの研究成果の発表の場であるとともに、文学研究科教員に研究発表の機会を提供、さらにCOE研究員に対して研究の進展を促す教育の場でもあると位置づけられます。さらに、COE活動の記録の場でもあります。このような多面的な性格を持つ雑誌の意味は、きわめて大きいと考えられます。

しかし、あくまでも学術雑誌でありますから、学問的な質を高度に保つことが何より要求されます。このために、編集委員会には強い編集権が与えられており、投稿論文に対しては、厳密な査読制度によって採否を決定しています。

(6)ホームページ委員会

COE事業全体をIT面からサポートする役割を果たしています。都市文化研究センターUCRCのホー

ムページを立ち上げ、これを通じてさまざまな情報を提供しています。COE研究員の公募はこれによって行われ、多くの応募者がありました。

専用サーバを導入して、最新のIT技術による研究活動の提案と推進や、各種資料のデータベース化をめざしています。

(7)COE事務局

三名の事務員によって運営されています。各種委員会活動に関する情報のかなめに位置します。センター会議と常任委員会の準備、各委員会・サブセンターに関する連絡、文部科学省・大学事務局に提出する諸書類の下案の作成、関係書類の管理、COE研究員との連絡、図書や郵便物の管理、『都市文化研究』『文学研究科叢書』等の発送、その他雑多な仕事を行っています。またプロジェクター・ノートパソコンその他の機器類を備え付けています。

トピックス TOPICS

平成15年度

「21世紀COEプログラム」理学研究科(数物系専攻)が採択される!

理学研究科数物系専攻の「結び目を焦点とする広角度の数学拠点の形成」プログラム(拠点リーダー:理学研究科 河内明夫教授)が、昨年度の文学研究科に引き続き、今年度の「21世紀COEプログラム」の研究教育拠点に採択されました。

結び目理論の数学的研究は、1970年代の終わりごろから数学のほとんどの最先端の研究分野と結びついて、深く研究されるようになりました。1980年代半ば頃からは、量子統計力学を中心とした理論物理学、環状DNAの遺伝子合成研究、ポリマーネットワーク、認識科学、複雑系の科学等先端科学の基礎研究モデルとして、研究されるようになっています。

本学は、結び目研究の土台であるトポロジー研究において設立時より世界レベルにあります。結び目を焦点とした数学の研究体制の確立と優秀な研究者の育成という観点に立ち、世界中から結び目関連の研究者が絶えず来訪し、講義・セミナー・国際会議や日常の交流活動により、結び目の真理と美を深く追求するような、世界最高水準の数学の拠点化を目指します。

伊藤公一名誉教授が2003年日本学士院賞を受賞

「分子磁性体の研究」(物理化学分野)

伊藤公一名誉教授(元理学部長、前大阪市科学館長)が、6月9日、天皇皇后両陛下の臨席のもと、日本学士院にて2003年度日本学士院賞を受賞されました。(岩村秀東大名誉教授、木下實東大名誉教授と共同受賞。)今回の受賞は、同名誉教授および同教授の研究グループの、有機磁性・分子磁性研究に関する独創的・開拓的な業績と、日本初の国際的な学際領域を確立したことが高く評価されたことによるものです。なお、日本学士院賞受賞は、一昨年の本学文学研究科小林道夫教授に続くものでした。

1号館　国の登録有形文化財に
―正面玄関に登録プレート設置―

本学1号館は、近代においてわが国の造形の規範となった建物のひとつとして、平成14年2月、国の登録有形文化財に登録されました。このほど登録番号が刻まれたプレートが文化庁より届き、現在、1号館の正面玄関、向かって左側の外部壁面へ取り付けられています（写真）。

登録有形文化財制度は、平成8年に導入された新しい制度で、国宝や重要文化財といった特に優れた建物を厳選し、強い規制と手厚い保護措置を講じる従来の文化財保護のあり方とは大きく異なり、近代の建物を中心とする多種多様な建物を、広く後世に継承していくための動的で緩やかな保護制度です。記憶を刻んできた街角の建物を地域の財産として認知し、それらをリスト化することをそもそもの目的とするものといえます。平成15年6月1日現在、全国で3,292件が登録されており、そのうち大学の建築は、東京大学安田講堂や京都大学本部構内正門、北海道大学古河記念講堂など、28大学85件となっています。関西では、本学、京都大学のほか滋賀大学、同志社女子大学、大谷大学など8大学があげられます。

1号館は、昭和初期に盛り上がりをみせたモダン・ムーブメントを背景とする、代表的な近代モダニズム建築で、本学の前身である大阪商科大学の学部本館として昭和9年に竣工しました。同時期に建てられた2号館、3号館、第2体育館、旧図書館・書庫も同様に位置付けられます。これらの建物は、大阪市建築課の技師によって設計されたもので、設計の中心となった伊藤正文は、のちに本学生活科学部の初代教授に着任し、バウハウスを意識した建築教育を志したことでも知られる人物です。こうした日本の建築の一時代を物語る本学の校舎群は、日本建築学会近畿支部による「関西のモダニズム建築20選」にも選ばれています。

1号館に設置されたプレートは、歴史的意義のある建物を本学が有していることを示すにとどまらず、本学の歩みそのものを想起させる手がかりとなるでしょう。

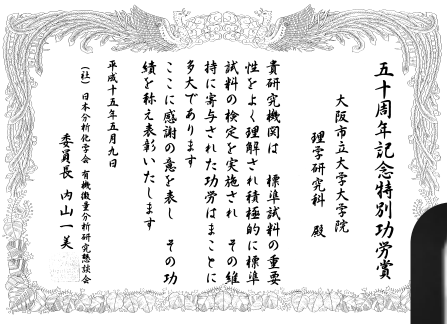
1号館に取り付けられた
国登録文化財プレート

竣工当時（1934年頃）の1号館

化学分析技術職員が
特別賞受賞

日本分析化学会と有機微量分析研究懇談会は、本年5月に、本学の理学研究科および工学研究科が、「化学元素微量分析の標準試料の検定・技術水準の維持」を長年行ってきたことを評価し、その功績を称えて、両研究科に対して50周年記念特別功労賞を授与しました。今回の功労賞は、元技術職員の合田純一氏（理学研究科）、および現技術職員の森薫輝氏（工学研究科）の技術的な寄与に対してなされたものです。

なお、受賞には、賞状のほか、微量元素分析装置を刻み込んだ透明なオブジェが授与されました（オブジェは理学研究科の研究科長室にてご覧になれます）。



学園 あ・ら・かると

大阪市立大学初の女性応援団長からのメッセージ

このような機会にスペースを頂き、大変光栄に存じます。私は市大初の女性団長という一風変わった肩書きを持っているため、何かと珍しい学生として取り上げて頂くことが多いのですが、私自身は何てことのない、人が大好きで、大学が大好きで明るく楽しいキャンパスが大好きな一人の女の子（という可愛らしい奴でもございませんが）です。ただ何となく華やかなチアリーダーに惹かれて成り行き入団し、色んな人・行事に出会い、そこで様々な人生観・考え方を知り、沢山の仕事を経験し、自分の中で色んなことを理解しようと考えあぐねた末、ある程度を昇華し、現在のような幹部となりました。その点では、現在の私の役職に性別は関係ないのでしょう。

ただ、幹部になるまでの過程において確かに言える事は、人を応援することが楽しくなり、人を楽しませたり喜んでもらうことが自分の中で重要な意味を持っていったということです。そして、今は市大のチアリーダーであることを誇りに思い、市大応援団に所属することを誇りに思い、市大生であることに大きな誇りを感じるということです。なぜ、いつ、こんな風に意識が高くなったのか…振り返ってみても私の中で自己意識が芽生えるのにコレといって大きな転換期になったものなどありませんでした。やはり、日々の小さな活動の積み重ねなのでしょうか。思えば入団から現在に至るまで、先に仕事も目標もない日、予定がない日というのは一日たりともなかった気がします。大学生活を充実したものにしたい、楽しみたい、と思っていた行動の表れでもあるかも知れませんが、厳しい環境におかれ、常に尻を叩かれていないと怠惰になる情けない性格の私には、「日々、馬車馬」の生活が、自分の向上心維持のためにも非常に宜しかったのだと思われます。

正直、「何で、こんな忙しいねん！」と嫌になった時期もありました。応援団の基本理念は「学園の明朗化」「市大生の意気高揚」。非常に抽象的で「○月○日までに～を仕上げろ」といった具体的なゴールはありません。逆に言えばゴールがない分、いくらでも手を抜けますし、楽もできます。そんな中、あえて仕事を見つけ、自分の時間や労力を割き、理念のため全力で奔走する、応援団の理想が高ければ高いほど仕事は無くなりませんし、考えるべきことも山積みになります。自由な状況に甘んじることなく大学のため、学生のため切磋琢磨する、これを無意識のうちに成し遂げるには相当の意識と精神力、自分への厳しさが必要でしょう。そう考えた時、我々が忙しいのは各人若しくは団全体が理念に向けてフレキシブルに機能している何よりの証拠ではないかと少しばかり安心いたします。

女である以前に41代団長であろうと決意し既に早半年が過ぎました。しかし、私が団長になる以前に目指した「理想の大学の姿」「理想の応援団像」はまだまだ実現できておりません。目下成長途中とでも言いましょうか。我が代の理想の大きさ、また団理念の壮大さを考える時、改めて任期である一年という期間の限界を痛感いたします。私は残り半年間、倍旧の気合と気迫で「日々馬車馬」生活を続けたいと思います。そして、私が先輩方から受け継いだ伝統ある市大応援団を第41代で更に成長させ後輩たちに残せるよう、また、「女性」でも伝統ある応援団の中で新しい可能性を創っていける、性別の障壁をなくす、という先例となるべく充実した活動をし職務を全うしたいと考えます。最後になりましたがこれからも市大応援団を（色んな所にいますので）よろしくお願いします。市大の今後益々の発展と、市大生の更なる活躍を祈念し筆を置かせて頂きます。

大阪市立大学応援団第41代団長
藤田　真里

◆終了　◇予定

で見た脳血管の新生、ネットワーク形成、血液の流れ」，谷下一夫（慶応義塾大理工）「細胞のマイクロバイオメカニクスとその応用」,【シンポジウム】『植物とバイオレオロジー』,『食物の咀嚼・嚥下におけるレオロジー』,『MCーFANによるヘモレオロジー：基礎と臨床』,『医療におけるヒアルロナンとそのバイオレオロジー』【一般講演】「臨床レオロジー」,「微小循環」,「ヘモレオロジー」,「ヘモレオロジー」「心臓・血管」「動脈硬化」,「計測法」「細胞」,「生体高分子・コロイド・ゲル」，年会長：西成勝好教授，6月，約100名参加。◆第14回食品ハイドロコロイドシンポジウム　主催：食品ハイドロコロイド研究会、則末尚志（阪大院理）「サクシノグリカンの分子形態と熱形態変化」，渡辺宏（京大化研）「水系分散系の構造とレオロジー」，D.E. Dunstan（Univ. Melbourne（Australia））“ Structure and Rheology of Gelling Polysaccharides:κ-Carrageenan/Locust Bean Gum Gels ”,P.A. Williams（North East Wales Inst.（U.K.））“ Binding Mn（II）to Low Ester Pectin and its Influence on the Rheological Properties ”，舘村卓（阪大院歯）「咀嚼・嚥下における筋活動と食品のテクスチャー」，坂田隆（石巻専修大理工）「ハイドロコロイドと大腸機能：大腸の粘液」，佐藤恵美子（県立新潟女子短大）「ゴマ豆腐の食感とレオロジー」，田口俊久（日食化工（株））「グルコマンナン含有素材の特性と利用」，久保内宏晶（雪印乳業（株））「ホイップクリームの物性と構造」，名坂基（太陽化学（株））「液状油の硬さのコントロール」，世話人：西成勝好教授，6月，文交センター，約70名参加。

ミーティング

商　◆経営学研究科新入生歓迎会記念講演会　辻阪京子氏（株式会社ソフトウェアテクニカル・サポート代表取締役社長）「女性起業家が創る商都大阪の都市ビジネス」世話人：経営学研究科長、5月。◆“ An Empirical Study of Management Controls in Product Development:An Interdependency Network Perspective ”クリス・エイクロイド氏（オークランド大学ビジネススクール講師）世話人：岡野浩教授他、5月。◆国際学術講演会“ Understanding the Dynamics of the Australian Accounting Profession: A Prosopographical Study of the Founding Members of the Incorporated Institute of Accountants, Victoria, 1886 to 1908 ”Garry Carnegie氏（ディーキン大学ビジネススクール教授）世話人：坂上学助教授他、7月。◆宮本憲一　滋賀大学学長　講演会「サステイナブル・大阪の公共政策」世話人：遠藤宏一教授、7月。

経　◆ファカルティ・セミナー（近代経済学）［3月12日］成生達彦教授（京都大学経済学部）「並行輸入と経済厚生」、松村敏弘助教授（東京大学社会科学研究所）“ Endogenous cost differentials between public and private enterprises: A mixed duopoly approach ”世話人：中嶋哲也助教授、［3月18日］三野和雄教授（神戸大学経済学部）「経済成長モデルにおける不決定性」、二神孝一教授（大阪大学経済学部）“ Dynamic analysis of patent policy in an endogenous growth model ”、中村勝克助教授（福島大学経済学部）「産業化と経済成長」、コメンテーター：柴田章久助教授（京都大学経済研究所）、世話人：森　誠教授

法　◆2003年度国際関係法研究会　福本渉（市大大学院後期博士課程）、「自国国家機関の法適用における外国公法の影響と国家管轄権理論ー特許権の問題を中心にー」、4月。

文　◆ナポリ東洋大学との地理学懇談会　Prof. Salvatore DIGLIO（ナポリ東洋大学），”Naples through maps and images ”、水内俊雄教授，”The historical transformation of poverty, discrimination, and urban policy in Osaka ”、ナポリ東洋大学の教官5名、学生18名、計23名、4月。◆郭齊勇教授講演会「現当代新儒家的反思」、5月。◆COE特別講演会　イ・マデ・バンデム学長（インドネシア国立芸大）「ジョグジャカルタにおけるツーリズム：その文化的アプローチ」、世話人：中川眞教授、6月。◆英米文化文学の夕べ（第1回）　杉井正史助教授「シェイクスピアと映画」世話人：山崎弘行教授、7月。

理　◆理学部数学教室談話会　古澤昌秋教授「保型エル函数の中心における特殊値」、4月。河内明夫教授「3次元多様体の分類」、5月。河田成人助教授「群環上の加群とAuslander-Reiten列」、5月。Ki Hyoung Ko博士（韓国科学技術院）“ Rational homology concordances of knots and links ”、6月。太田啓史助教授（名古屋大学大学院多元数理研究科）“ Lagrangian submanifold, A∞ algebra and cycles of moduli of Riemann surfaces ”、6月。加藤信助教授「極小曲面の崩壊とフラックス」、6月。今吉洋一教授「リーマン面の正則族とそのモノドロミーを巡って」、7月。◆理学部化学科・物質科学科共催談話会　平成15年度第1回“ Cyclopropylmethylsilanes as Surrogates to Molecules of Potential Synthetic Interest ”Veejendra K. Yadav教授（インド工科大学）、4月。第2回「炭素活性種を自在に用いる有機合成に向けて」山子茂教授、4月。第3回“ Ultrafast Photoinduced Chemical Reactions Probed by Dissociative Ionization ”八ッ橋知幸講師、4月。第4回“ The Quinoprotein Ethenol Oxidation System of Pseudomonas Aeruginosa ”Helmut Goerisch教授（Technische Universitaet Berlin、ドイツ）、4月。第5回「FET構造におけるフラーレンおよびその関連物質の電気的特性と構造」熊代良太郎（本学理学研究科博士研究員、科学技術振興事業団研究員）、5月。第6回「小さな配位子を持つ新型遷移金属錯体の合成、構造、磁気物性の研究」伊瀬智章（本学大学院理学研究科博士研究員、科学技術振興事業団さきがけ博士研究員）、5月。第7回「ペプチド設計の魅力：人工アミノ酸、わっぱ、かたち、はたらき、でのぼ」西野憲和教授（九州工業大学大学院生命体工学研究科）、5月。第8回「新しい高圧の科学」毛利信男教授（埼玉大学理学部）、5月。第9回「ミオグロビンの基本骨格を利用した高難度酸化酵素の構築」渡辺芳人教授（名古屋大学大学院理学研究科）、5月。第10回「レーザーによる気相の分子分光」篠原秀則（本学大学院理学研究科博士研究員）、6月。第11回「光やプロトンに応答する錯体」西原寛教授（東京大学大学院理学系研究科）、6月。◆平成15年度第1回種子植物談話会　志賀隆（神戸大）、村上哲明（京 都大）他、世話人：田村実助教授、4月、理学部附属植物園。

工　◆建設資源リサイクル研究会総会　世話人：山田優教授、特別講演：福原裕（大阪府環境農水部）「大阪エコエリア構想」、三品文雄（日本下水道事業団、本学卒）「下水道資源の有効利用」5月、大阪弥生会館。◆X線分析講演会 Rene Van Grieken教授（ベルギー・アントワープ大学）“ Trendin X-ray Spectrometry and its Applications ” 世話人・辻　幸一助教授、5月。◆建設資源リサイクル定例会　世話人：山田優教授、第62回、伊藤秀敏（広島工大）「乾留炭化物を用いた排水性舗装」、西元央助手「泥土改良粒状材路盤」、麓隆行助手「再生細骨材使用コンクリート」、福山知広（大学院生）「砕石粉のコンクリートへの適用」7月10日、文交センター、第63回、中西亜貴夫・玉井元治（近畿大）「木質系廃棄物利用の強化型調湿炭」、佐野正典（近畿大）「アスファルト舗装発生材の常温舗装材料化」、木内龍彦講師「市内における建築物解体量とコンクリート排出量」、7月、文交センター。

短　　信

◆オープンキャンパス(大学説明会)7月31日(商・経・法・文学部)8月1日(理・工・医・生活科学部、看護短大)、学部説明・入試説明・公開実験・ミニ講義ほか。
◆第112回ボート祭 6月1日大川(桜宮公園)桜宮橋～源八橋間
◆第14回OCUSA定例総会 6月21日。

研 究 室 か ら

法 ◆高田昭正『被疑者の自己決定と弁護』、現代人文社、2003年5月。◆西谷敏著" Vergleichende Einfuehrung in das Japanische Arbeitsrecht ",2003, Carl Heymanns Verlag ◆守矢健一" Savignys Gedanke im Recht des Besitzes ", 2003, Studien zur Europaeischen Rechtsgeschichte Band 164, Vittorio Klostermann Verlag.
文 ◆瀬戸賢一『日本語のレトリック一文章表現の技法』、岩波ジュニア新書、2002年12月刊。◆瀬戸賢一『ことばは味を超える一美味しい表現の探求』海鳴社、2月刊。◆山崎弘行(編著)『英文学の内なる外部ーポストコロニアリズムと文化の混交』、松柏社、3月刊。◆金児曉嗣(編著)『サイコロジー事始め』有斐閣、5月刊
看 白田久美子教授(成人看護学)、大阪府看護協会会長表彰受賞、6月19日、大阪府看護協会通常総会。

学会・シンポジウム

法 ◆大阪市立大学法学部50周年記念国際学術シンポジウム『グローバル化の時代における法律家の社会的責任』 主催:大阪市立大学大学院法学研究科、7月。【第1日】セッションⅠ「貿易と環境ー地球環境保護と自由貿易体制ー」コーディネーター:松田竹男、報告者:平　覚、Harold Hohmann(ドイツ・フランクフルト大学)、Myong-Joon Roe(韓国・韓国外国語大学)。セッションⅡ:「経済的弱者の保護」コーディネーター:国友明彦、報告者:桐山孝信、阿部浩己(神奈川大学)、Klaus Sieveking(ドイツ・ブレーメン大学)、Henry Rojas(フィリピン・National Institute for Policy Studies)【第2日】セッションⅢ「社会的弱者としての先住民の保護」コーディネーター:佐々木 雅寿、報告者:常本照樹(北海道大学)、David Schneiderman(カナダ・トロント大学)、Hedar　Laudjeng(インドネシア・弁護士)。セッションⅣ「Academic Lawyersの社会的責任」コーディネーター:阿部 昌樹、報告者:高田 昭正、Malcolm Smith(オーストラリア・メルボルン大学)、賀 衛方(中国・北京大学)、Jefferson R. Plantilla(フィリピン・弁護士)。
文 ◆大阪市立大学フランス文学会 鈴木田研二非常勤講師「発音と綴り字の関係の教授法について」、藤本智成「ジイドの『ロベール』と『ロベールあるいは一般の利益』」 世話人:中島廣子教授、3月。◆COEシンポジウム「都市文化ー伝統と現代」 中川眞「大阪市における文化政策」他、世話人:中川眞教授、3月、インドネシア・ガジャマダ大学。◆COEシンポジウム「路上で何が起こっているのか」 中川眞「大阪におけるストリート・ミュージック」他、世話人:山野正彦教授、中川眞教授、4月、インドネシア・ガジャマダ大学。◆大阪市立大学日本史学会(第6回) 大野薫(大阪府教育委員会)「近畿地方における縄文時代集落の空間構造」,大隅亜希子(山梨大学)「律令時代の計量と度量衡制」,高岡裕之(都留文科大学)「昭和戦前期大阪の映画文化」,世話人・広川禎秀教授,5月。◆日本音楽学会関西支部第306回研究会 世話人・中川眞教授、5月、文交センター。◆民俗芸術学会第64回研究例会 世話人・中川眞教授、6月、文交センター。◆大阪市立大学中国学会(第52回) 北野元美「柳宗元の植物詩」、豊田周子「日本語作品にみる台湾人作家王昶雄の文学観」、史彤春「語気助詞「倒」字語用分析」、謝安琪「拾骨儀礼に現われた家族制度」、岩佐昌暲「中国現代文学の創作モデル」会長・齋藤茂教授、7月、文交センター。
理 ◇第1回大阪市立大学モレキュラーサイエンス(分子科学)国際会議(The 1st OCU Int. Conference on Molecular Science, Aug 1ー2, 2003)理学研究科物質分子系専攻主催:分子磁性・スピン物性、超高速レーザー光化学・物理、新酵素化学、超分子化学、および新規な物質科学に関する実験的・理論的な最新の成果について、内外の一線の科学者を招聘し集中的に討議。招待講演以外のポスター発表は、大学院学生のフラッシュ口頭発表方式が採用。平成15年8月1日・2日、学情センター10階、会議はすべてインターネットでライブ中継・配信予定。
URL:http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/~ocuic/
◇第6回バイオ産業研究会 池田新矢(大阪市大)他、食品の微細構造と物性、演題:「AFMによる食品の構造観察」他、世話人:谷口誠教授、平成15年9月3日、大阪市立工業研究所。◆2003年度日本動物学会近畿支部研究発表会 幸田正典(大阪市大)、桜井啓輔(京都大)他、世話人:沼田英治教授、5月。◆第4回関西グライコサイエンスフォーラム 苅田修並(大阪市大)他、糖質・糖鎖の構造と機能、合成機作、世話人:飯塚勝助教授、5月、千里ライフサイエンスセンター。
工 ◇TXRF2003サテライト会議 日本分析化学会X線分析研究懇談会主催、「微小部X線分析に関する国際会議」、世話人:辻　幸一助教授、9月13日、文交センター、詳細:http://www.a-chem.eng.osaka-cu.ac.jp/satellite/
医 ◇第3回日本認知療法学会 会長:切池信夫教授(神経精神医学)「認知療法の普及を目指して」、事務局長:井上幸紀、平成15年10月4日・5日、医学部学舎・大講義室◇第38回近畿肝癌談話会 若狭研一助教授(病理部)「特異な画像、組織像を呈した肝癌・肝癌類似病変」、平成15年8月9日、エコルテホール(阪急電鉄本社ビル1階)◆日本核医学会近畿地方会(第36回)シンポジウム「PET検査を用いた悪性腫瘍の診断」会長・塩見進教授(核医学)、7月、医学部学舎4階。
◆Urogynecology研究会(第2回) 会長:石河修教授、5月、大阪国際交流センター、約150名参加。
生 ◇日本家族社会学会大会(第13回) 大会実行委員長:畠中宗一教授、平成15年9月6・7日、一般の方の当日参加可・会費4000円◇日本栄養・食糧学会近畿支部大会(第42回) 大会長:中谷延二教授、平成15年10月25日、田中記念館および1号館、公開シンポジウム『近畿若手研究者による「食と栄養:最近の研究動向」』および一般講演、約300名参加。◇第25回日本家政学会関西支部研究発表会 実行委員長:佐藤昌子教授、平成15年11月1日 研究発表会ならびにシンポジウム、13時～、学情センター、約250名参加。◇日本香辛料研究会学術講演会(第18回) 会頭:中谷延二教授、平成15年11月14日・15日、田中記念館、シンポジウム『香辛料成分機能性研究のフロンティア』および一般講演、約200名参加。◆第26回日本バイオレオロジー学会年会 主催:日本バイオレオロジー学会,【特別講演】" Dynamics of cellular adhesion " Pierre－Gilles de Gennes(College de France), " Dynamics of vesicles: transient pores, wedge actants, fusion and tube extraction " Françoise Brochard(Institut Curie)【教育講演】志賀健(大阪大名誉教授)「赤血球のMagnetophoresis」, 新見英幸(国立循環器病センター研)「血管新生のレオロジー:生体顕微鏡

ノーベル物理学賞受賞記念

小柴昌俊氏の講演と広中平祐氏との対談　本学にて開催!

超新星爆発によるニュートリノを世界で初めて捕らえ、2002年度ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊東大名誉教授の講演(題目「ニュートリノ天体物理学の誕生」)と、数学のノーベル賞とも言われるフィールズ賞を受賞された広中平祐ハーバード大・京大名誉教授との対談が、6月13日(金)、本学学術情報総合センターの大会議場(メイン会場)および複数のサテライト会場(LANライブ中継)にて開催されました。(主催:大阪市立大学・読売新聞大阪本社、後援:大阪市教育委員会、協賛:河合塾。)

小柴　昌俊
東大名誉教授

講演では、小柴名誉教授が若いころ本学理学研究科物理学研究室に滞在され学んだことや、自ら「ニュートリノ天体物理学」を開拓した成果について、情熱をこめて語ってくださいました。また対談では、世界を代表する二人の科学者が大発見に至る秘話から、科学技術、教育のあり方に至るまで、幅広いテーマで語りあい、招待された高校生、一般市民、本学の学生、研究者ら、約1400人が聴き入りました。

なお今回の講演と対談の模様は、学術情報総合センターから、インターネットで西日本の高校、教育機関のネットワークセンターへライブ中継・配信されました。

広中　平祐ハーバード大・京大名誉教授

●大阪市大ホームページ
http://www.osaka-cu.ac.jp/
●広報ホームページ
http://koho.osaka-cu.ac.jp/
●お問い合せEメール・アドレス
koho@osaka-cu.ac.jp

表紙写真 ―― 文学部棟

企画・編集:広報スタッフ　代表　南齋征夫(工)
荒井　耕(商)　朴　　一(経)　西谷　敏(法)　橋爪紳也(文)
福島祥行(文)　田中礼二(理)　保尊隆亨(理)　小澤文幸(工)
中村　肇(医)　朴　勤植(医)　北浦かほる(生科)　中野秀男(創)
小長谷一之(創)宝田　穂(看)脇山　健(事務局)川上　悟(事務局)
編集事務　石井小巻　吉原靖子
編集協力　広報・ホームページ委員会

■協　賛
(財)大阪市立大学後援会
有恒会　理学部同窓会
工学部同窓会　医学部同窓会
生活科学部同窓会

■発　行
大阪市立大学事務局
〒558-8585　大阪市住吉区杉本3-3-138
TEL06-6605-2011
FAX06-6692-1295

毎月20日はノーマイカーデー!